

TOPIX

IMF-JC労働リーダーシップコース40周年記念シンポジウム

記念講演「日本のこれから」

数学者／作家 藤原 正彦氏



〈著書〉研究論文多数の他、著書に『若き数学者のアメリカ』（新潮文庫、日本エッセイストクラブ賞受賞）、『数学者の言葉では』、『数学者の休憩時間』、『遙かなるケンブリッジ—数学者のイギリス』、『父の威厳・数学者の意地』、『古風堂々数学者』（いずれも新潮文庫）、『天才の栄光と挫折—数学者列伝』（新潮選書）（文春文庫）、『祖国とは国語』（新潮文庫）、『国家の品格』（新潮新書）、『決定版 この国のけじめ』（文春文庫）他

講師プロフィール

1943年 満州国新京（長春）で生まれる
1946年 引き揚げ
1968年 東京大学大学院
理学系研究科修士課程修了
同年 都立大学理学部助手
1972年 ミシガン大学にて研究に従事
1973年 理学博士（東京大学）
1973年 コロラド大学助教授
1976年 お茶の水女子大学理学部数学科助教授
1987年 ケンブリッジ大学にて研究と教育に従事
1988年 お茶の水女子大学理学部数学科教授
2009年 3月 退官

「国家の品格」が出て以来、随分とこういう場所でお話することが多くなりました。私の3人の息子たちは私がこうした場所でお話することにあまり賛成ではありません。あまり話をすると、「国家の品格」の著者に品格が全然ないことがばれてしまうから、家にじっとしていろと言われます。（笑）

新自由主義が日本経済に与えた打撃

この10年ほどを振り返ると、改革に次ぐ改革。その結果、政治も経済も悪くなったような気がします。社会全体、そして人の心までもが荒れて、「日本の国柄」は、ことごとく壊されてしまった。日本国民が自ら、日本の良いものを捨て去り、その結果、経済をも破壊してしまった。しかも、この改革の多くが市場原理主義あるいは新自由主義、すなわち、

すべてにおいて規制緩和、規制撤廃を進め、自由競争にすべきであるという考えに基づいています。

新自由主義などというものは、一言で言えばアメリカのシカゴを中心とした経済学のある一学派に過ぎません。それを日本のメディアは、グローバルスタンダードとか言うそもそも英語にもない造語を使って、これに従わないと世界から置いてきぼりを食ってしまうと訴えてきた。そして今でも、「規制＝悪い」「自由競争＝良い」と思っている人たちがいます。世界中の人、日本中の人自由を好んでいると言っているが、そんなに自由は良いものでしょうか。新自由主義とは、公平に戦うことを条件に、勝ったものが全てを手にして良いという理屈です。つまり、自由競争の末には、当然のことながら大きな格差が生まれるのです。

極めて正しかった日本の経営方式

今、日本型の経営方式が、ないがしろにされています。つまり、従業員が会社に対して、忠誠心と責任感を持ち、忍耐強く頑張ること、そして会社はそれに対して、終身雇用と年功序列、さらには特別優秀な人には、2階級、3階級の特進など昇進時で応えるということ、これが制度疲労だと言われている。

1980年代、世界経済の中で一人勝ちをしていた日本に対して、世界は何と言っていたか。不況時に、経営陣・役員の方から月給を減らしていくやり方、社員が一丸となってリストラそのものを失くす努力をするやり方、全員が少しづつ犠牲となり皆で耐えるという、こんな家族的な経営は世界中どここの国も真似できなかった。だから、世界の国々は「こ

「日本の経営方式はずるい」と言い、日本を羨望と嫉妬で非難していたのです。

それが、90年代初めのバブル崩壊後、本来であれば日本人が世界に教えていくべき素晴らしい経営方式を、日本人は捨て去り、新自由主義に走ってしまった。日本は困難に直面したときに、過去の良いものを参考せず、手本を海外に求めてしまう。どうしてこんなに自信が持てないのでしょうか。

今、日本のものづくり産業がすべきこと

改革が繰り返され、株主至上主義がもてはやされた結果、「ものづくり」には向かない日本になりつつありま

す。では、なぜ、株主至上主義が、ものづくりに向かない状況を生み出すのか。ものづくりに基礎研究や基礎開発が必要です。たとえば5年後、10年後に花が開くかもしれないというロングスパンで研究・開発をしながらはならない。ところが、株主は5年ましてや10年なんて待ってくれないのです。こうした行き過ぎた株主中心の考えの中で、息の長い「ものづくり」など出来るわけがないと思います。



こうした不況時に、日本のものづくり産業は、どんなことがあるうともジツと我慢をして、研究・開発を続けるべきです。そして、株主至上主義からは、少し距離を置くことです。会社は従業員と経営者のものでもあるのです。会社に対する思い入れからして、株主と従業員では大きく違います。株主は1ヵ月後の株価の上昇を祈り、株価が上昇すればそれを売りに出すのですから、そういう人たちと従業員を同じように扱うこと自体が間違いなのです。

株主至上主義は、日本のものづくり産業を潰しかねません。株主至上主義を貫けば、基礎研究はおろそか

にされ、中長期的に下降をたどらざるを得ないと私は思うのです。

日本は国柄で勝負をするべきである

日本という国には、国柄しか取り柄がない。他には何も無い。たとえば明治維新までの1000年もの間、日本は封建主義だった。そして江戸時代には200年以上の鎖国をしてきた。そこから離れて、たった37年で、世界最大の軍事大国であるロシアを武力によって叩きのめした。これは、はなれわざです。

あるいは、第二次大戦に終戦する昭和20年、アメリカは日本中を猛爆した。昭和20年の8月10日を過ぎて、爆撃を止めなかった。そして、2発の原爆を日本に落とされた。日本人の心も、経済も、何もかもが完全に疲弊した。しかし、そのわずか30年後に、日本は世界第2位の経済大国になった。

日本は、明治維新後たった37年で世界の列強になり、第二次大戦後たった、30年で世界の経済大国となった。なぜか。これは、国柄のおかげなんです。日本のエリートと世界のエリートを比較してしまうと、日本は欧米に劣ります。しかし、一般国民の平均基礎学力については、20年

前に私はイギリスやアメリカの大学で4年ほど教えていましたが、日本のほうが圧倒的に上でした。だからこそ、日本の労働者のレベルも圧倒的に高かったし、素晴らしい品質のものができた。すべての労働者が文字を読むことができ、自分の会社や自分の上司の気持ちや目的をきちんと理解できる。問題点改善のための提案ができる。仕事に責任感を持ち、納期を守る。これらは、日本人にとつては当然のことなんです。こうしたことが、日本の国柄なのです。

この国柄によって日本は今日まで世界を圧倒して生きながらえてきたことを忘れてはなりません。

ものづくりに適した日本人の美的感受性

日本のあらゆる学芸でとびぬけて凄いのが文学です。西暦500年から1500年までの1000年の間に生まれた日本の文学作品は、同時期の海外のものとは比べ、はるかに優れています。万葉集、古今和歌集、新古今和歌集、源氏物語、平家物語、太平記など、とにかく次から次へと優れた文学作品が生まれています。その次が芸術。天平時代の日本には、ミケランジェロ級の彫刻家がゴロゴロいたとされている。文学、

芸術に次いで、数学にも優れていた。数学や数学会でよく言われることですが、もし数学にノーベル賞があったら、日本人から20名以上は固いとされています。それほど凄い。その次に優れているのが理論物理学です。2008年にはこの分野で3名がノーベル賞をとりました。なぜ、文学、芸術、数学、理論物理学、こうしたものに日本人が優れているのか。これらに重要な資質とは、知能指数ではなく、偏差値でもなく、実は美的感受性なんです。

この美的感受性というのが、日本人のお家芸である。これはものづくりにも言えることです。例えば、数学の世界もすべて美しく出来ている。なぜ美しいかは分からない。神様がそう創ってしまったんです。たとえば三角形の内角の和は180度。なぜ直線と同じ180度なのか。たとえば183・675度だって別に良かった。しかし180度と神様が創った。物理の世界も、科学の世界も美しい公式で書かれている。同様に、「ものづくり」においても、最も良いとされる品質のものは美しい。日本人は美的感受性に優れているから、それを追求しながら、自然に最も良い品質のものを生んできた。

たとえば1543年にポルトガル

から種子島に鉄砲が伝来した。日本人は、その構造を分析し、すぐに真似して作った。そして、本来のものに必ず独創を加えて、圧倒的に良いものにする。鉄砲伝来から30年後には、織田信長が3000丁、4000丁という鉄砲を大量生産していた。しかも、その性能は世界一だった。中国から伝わった仏教や漢字についても同様です。日本人は、良いと思っ たものを丁寧に学習し、独自の美的感受性をもとに手を加え、さらに良いものにしてきた。日本で、ものづくりが発達した背景には、こうしたことがあるのです。

今後、世界の中で日本が生き残っ



ていくためには、日本人のお家芸である美的感受性を存分に生かせる「ものづくり」以外にはない。ものづくりこそ、日本人が持つ美的感受性にマッチしたものです。この「ものづくり」でこそ、世界を制覇できるのです。どんなに不況になっても、ジーツと我慢して忍耐強く真面目に基礎研究を続けて、世界一のものを作る。これこそが日本にとっては最善の策なのです。

虫の音を美しい音楽のよ うに聴くことのできる日 本人

日本人に備わっているのは、美的感受性だけではありません。たとえば、「ものの哀れ」という感覚は日本人にしか通じない。秋になり、虫の音を聴く。それを美しい音楽のようにして聴ける。これは、ある研究者によると、世界で日本人と南洋のどこかの黒人だけの能力らしいです。それだけではありません。日本人は、音楽のように聴くだけでなく、そこに秋の物悲しさや憂愁を感じる。さらには、そこに儂い人生を投影することすらできる。明治のころにいた、ラフカディオ・ハーンという人は、このような感性を持っているのは類まれな詩人のみであると。これを日

本では一般の庶民が普通に持っている。彼は、そのことに驚いたそうです。彼が言うには、そもそも日本には、美しい音で鳴く虫がやたらと多いのです。私も欧米に4年間住んでいましたが、確かに美しい虫の音を聞いたことがない。ろくな虫しかいなかったのでしょう。(笑い)

それに、日本人は秋になると、紅葉狩りなんてことをします。こんなことをするのは日本人だけです。欧米諸国の人にとっては、紅葉なんていうのは、単に死にかかった葉っぱにすぎない。(笑い)私も、秋に、アメリカやイギリスに行くと、車で山の上のほうまで行くわけです。1時間走っても2時間走っても、右も左も真っ黄色。なぜか。そもそも木の種類が少ないんです。ほとんど同じ種類だから、皆一様に黄色。日本には木々の種類がものすごくある。秋に山へ行くと、緑も黄色も赤も橙色もある。

昭和初期に8年ほど日本に住んだサンソム婦人が書いた本を読むと、日本には花や木の種類がやたらに多いとのこと。木だけを見ても、南洋のものから北欧のものまである。白樺なんていうのはヨーロッパでは北欧の木です。日本には何でもありません。日本は植物が豊かなんです。それに加えて、四季がハッキリしている。

だからこそ、繊細な美しさを感じる
ことができる。これによつて、「もの
の哀れ」が出来てきたわけです。

他にも、日本人には自然にひざま
ずくような、美しい情緒もある。欧
米人にとつての自然は、人類を幸福
にするために征服すべき対象しかな
い。日本人は太古の昔から、人類の
幸福のためにくだらない目的のため
に、自然を征服しようと考えた阿呆
は一人もいない。日本人は、「自然は
人間よりも遥かに偉大なものだ、超
越的なものだ、あるいは人間は自然
のほんの一部にすぎない」と考えて、
ひざまずいてきた。非常に謙虚なん
です。自然の上に人間がいるという、
欧米的で傲慢な人間主義とは正反対
にある謙虚な態度を持っているのが
日本人のほうなんです。日本人のこ
の態度を世界に教えていかないと
いけない。人類のために征服すべきだ
なんて考えていたら、現在の科学技
術力で自然はあつという間になくな
つてしまう。人間中心主義ではダメ
だということを日本人が世界に教え
ていかなければならない。

**家族愛・郷土愛・祖国愛・
人類愛、そして「惻隠」
を持つことの重要性**

「故郷を懐かしむ心」は、日本人の

専売特許です。故郷の山や谷、空や雲
そよ風、あるいは足元の石ころや土
くれにも思いをはせて、ときおり涙
を流す。素晴らしい情緒です。この
ような情緒は国際人にとつて最も重
要な資質です。うまい英語よりも遥
かに重要なことです。

このような「郷土愛」と表裏一体な
のが、「家族愛」であり、「祖国愛」です。
まずは「家族愛」、「郷土愛」、「祖国
愛」、この順番で子どもたちに教えて
いかななくてはなりません。その3つ
が固まったところで、もつとも崇高
である「人類愛」を教えるべく。し
かし、今、学校ではいきなり「人類
愛」から教えたりする。順番が違うこ
とは、少し考えればわかることです。
涙ながらに家族を愛し、涙ながらに
故郷を愛し、涙ながらに祖国を愛す
ることができる人間は、他国の人の
思いまでをもよく理解することがで
きます。すなわち、健全な「家族愛」・
「郷土愛」・「祖国愛」を持つことがで
きれば、自然に「人類愛」が生まれ
戦争の抑止力にさえなります。

また、日本には、非常に洗練され
た「武士道精神」というものがあり
ます。この中核となつていいるものは、
慈愛、誠実、勇気、正義です。そして、
明治のころに新渡戸稲造先生が言っ
た、「惻隠（そくいん）」です。惻隠

というのは、弱者や敗者への同情
共感、涙です。それに、差別される
ものに対しての「思いやり」を意味
します。これからの時代は、この「惻
隠」がキーワードにならなくてはな
らない。弱者や敗者、差別される者
に対しての思いやりが重要なのです。
こうしたことを子ども達にも徹底し
て叩き込んでいけば、いわゆる人を
死に追いやるのような「陰湿ない
じめ」は無くなつていくのではない
でしょうか。自由や平等を叫んで、
弱者を踏み台にして、己の幸せを築
くような考えを改めて、弱者や敗者
への涙、卑怯を憎む心、名誉と恥を
重んずる「惻隠」の情というものが、
世界で最も重要なものになる。この
考えを日本人は世界の人に教えてい
かねばなりません。

**日本人が本来の国柄を取
り戻せば世界も変わる**

このように子どもから大人まで全
ての日本人が、日本の国柄である「美
的感受性」や「家族愛・郷土愛・祖国愛・
人類愛」をきちんと取り戻し、そし
て弱者や敗者への涙に通じる「惻隠」
を取り戻すことができれば、日本は
必ず、欧米諸国が羨むような素晴ら
しい社会国家になります。そして世
界の国々が日本を真似するようにな

るでしょう。すなわち、日本人が本
来備えていた国柄を取り戻すことは、
祖国である日本を救うことだけでは
なく、世界を救うことになる。ひい
ては、人類を救うことになる。そして、
日本人として生まれてきた本当の意
味は、そのような形で人類に貢献す
ることではないかと、私は思うわけ
です。

(文責・編集＝金属労協組織総務局)

金属労協（MFJC）は、1964年
結成当初から労働組合役員教育に着目
結成3年目の1967年には大学と労
働組合が提携した日本初の画期的な試
みとして、東京・明治学院大学の協力の
もと、労働リーダーシップコースをス
タートしました。その後、1969
年12月に同志社大学の協力のもと、京都・
関西セミナーハウスにおいて西日本労
働リーダーシップコースが開設しまし
た。2009年1月に労働リーダーシッ
プコース（旧西日本コース）は開設40周
年を迎え、開設以来40年間の卒業生数
は1343名に達しています。2009
年5月15日には、同志社大学寒梅館に
おいて労働リーダーシップコース40周
年記念シンポジウムを行い、記念式典に
続いて、藤原正彦氏を講師に迎えて「こ
れからの日本」をテーマに記念講演を
行いました。記念講演には、記念式典参
加者160名に加え、学生・一般参加者
170名の合計330名が参加しまし
た。40周年記念誌に掲載した記念講演要
旨をここに転載します。